



第 43 号  
 月 1 回 発 行  
 ひの心を継ぐ会  
 〒799-1336  
 住所:愛媛県西条市  
 上市甲 720-1  
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は 大和世界を建設します

神道(十三)(大和世界の建設)

古事記

神秘的方法(1)

竹葉 秀雄

東洋に於ては如何。論語二十卷は悉く「反省の書」である。そして、その中に出てくる中・仁・孝・忠恕・義・礼・和・信は概念であり、イデアである。勿論具体的実践を重ねているのであるが、日本の三種の神器はこれらの概念を更に高次に思考しまた直観によって象徴されたイデアである。

ソクラテス一派は感覚よりも理性を、肉体よりも靈魂を尊ぶ哲学者(知恵の愛求者)なので、このような超感覚的な普遍概念こそ哲学者の眞の愛求すべきものとされた、そこでプラトンは、彼らの後継者として、彼らのイデアの思想とその靈魂をいっそう広い見地で発展させ体系化させた。先ずイデアに関しては、彼はそれを単に数学的諸命題や倫理的諸行為の原理とし、規準としただけでなく、経験界のあらゆる個物についてその種や類に対応するそれぞれのイデアを認め、これらのイデア全体からなる世界(イデア界、思考界)の内部構造、イデアの相互の関係と秩序、各イデアの構成要素などを純粋な思考での弁証法によって研究するとともに、イデアとそれにあずかる(それでそう述語される)諸個物との関係を、一般にイデア界と経験界との関係を、原因と結果、原型と模像、実体と現象、実物とその影の関係とみて、数学・天文学・自然学などの対象一切の生成と存在を理解し、さらにこれによってわれわれの現実界を理想的原型なるイデア界に近づけ救い上げようと努力した。しかしここで注意すべきは、プラトンでは、そのイデアが個物からあまりにも超絶的に切り離されたことである。彼のイデアは、人の頭の中にある抽象的な

概念たるに止まらないうで、それを思考する人の思考の中に存するある客観的な実在であり、思考者の中にある思考内容(思想)ではなくて思考者の外にある思考対象(実在)であるとされた。

儒教に於ける天、天帝の思想であり、日本の高天原、天之御中主神の把握であるが、根本的にそれは離別した両者でなくて、天の具体化されたものが人間を始め万物であり、そこにある理法が、仁・義・礼・信、また三種の神器などであると観ているのである。

このことは、ある普遍的なもの(例えばある自然法則)の客観性を認めたものとして、人の意識するとか否にかかわらず、意識とは独立に、ある普遍的なものが客観的に存在するという弁証法的唯物論の一原則を予見したものと観ることも出来る。同時にしかし、そのイデア(普遍)をば、それにあずかる諸個物(特殊)からも離れて天上かどこかに存する独立の実体としたこと、しかもこれが眞実在であつて個物はその影であり仮象であるかのようにみられたことは、彼のイデアの説が客観的観念論一般の源泉であり、原型であるとされる所以である。

此のプラトンの哲学、即ちイデアが眞実在であつて個物はその影であり、仮象であるという思想は、仏教の「本」「迹」または「仮」「空」「中」の三諦の思想と相通じるものがあり、後に記する「大方広仏華嚴經の卷十夜摩天宮菩薩說偈品第十六(唯心偈)」の画師と彩色の例に示す、「物は心の影」と考え合せて面白い、現代「生長の家」の思想はここに在る。

## 農士道

菅原 兵治

## 第四章 士道論

## § 第四節 士たるの生活

## 道義的立志

士的生活に於ける「志」の重要な事は実に上述の通りである。故に其の志の内容は真に道義的なるを要する。自分では志を立てたつもりで居ても、それが若し誤つて正しい道に立っていなかったならば、其の生活は決して士的生活とはいえない。世に自らは正道を踏みりと堅く信じつつ、其の実邪教正道に陥つて其の軌道を邁進し続けている輩が決して少なくない。近來邪教信者や、誤れる主義者等の言動を見ても肯かれることと思う。苟くも士道という以上、其の志は飽くまでも正しき人間の道の上に立てるものたるを要する。此点に就いて山鹿素行の士道論中に述べている次の所論は深く吾等の照顧すべきものと思う。

「志出来なば、我より先だつて志あつて能く行い得たらん人を求め、是に案内を頼んで其の引導に任せつべし。其の師たる人の行跡違ふ処あるか、言は似て其の事物に応ずる処明かならざるには、速かに去つて従ふことなかれ。邪師に久しくそまるときは、覚えず其人に荷担あつて、誠の道に弥々とおざかるべし。かくの如く外を尋ね学ぶといえども、外に聖人の師なくんば、自ら立帰つて内に省すべし。」

と云つて、立志行道に當つては、先ず正師を求むべきことを教え、若しそれが得られなければ自ら内に省みて理性の命に従えと教えている。しかも理性の声というも、未熟な者には往々にして不明にして過誤に陥ることなしとせぬ。そこで更に聖賢の教に従ひ、決して私を以て道を論ずべからざることを次のように懇諭している。

「孔子曰志於道とは、此の心にや。道というもののあるべく、私を以ては論ぜられざることなりと。其の志の立つことあらざれば、道に至るべきようなし。故に道に志すといえるなり。世に少しなれて、賢がおなる輩は、推して道を定め、此の外に別に相異なることは非ずと、私の意見を立てるを以て、道ここに遠ざかりて、遂に大道に入るを得ざるなり。」

人生を真剣に生きる者にとつて、立志は正に命懸けのものなるが故に、真に入念

戒懼すべきことである。周囲の事情や一時の欲念から唯単に之を欲するからというので、直ちにそれを「志」と妄断してしまうことは深く慎むべきことである。

## イへとカマド

三浦 夏南

「イへ」という言葉はどういう語源からきた言葉であろうか。現在では漢字の「家」のイメージが強く、大和言葉としての「イへ」という響きについて考えることは少ない。所説あるようであるが、本居宣長先生の解説が古事記神話とも関りが深く腑に落ちるものである。「イ」は接頭語であり、主となる意味は「へ」にある。「へ」とは「ナベ」の「へ」と共通するものであり、煮炊きするものという意味である。これは昔農村で家のことを「カマド」と呼んでいたことを考え合わせると、さらに説得力がある。カマドもそこで煮炊きをする場所であり、ナベのへと相通ずる。分家することをカマドを分ける。家が栄えることをカマドを興すなどと言っていたこともそれを裏付けるものであろう。

どうして我々の祖先は家のことを「イへ」や「カマド」と呼んで煮炊きする場所を中心に考えたのであろうか。現代人にとって食べることは、肉体を維持するため、健康であるため、あるいは食べ物の美味しさを楽しむためという唯物的なことに偏っているが、古の人々にとって共食とは魂、精神を共有するという宗教的、靈的行事であったからである。現在でも同じ釜の飯を食った仲間などということがあつたが、同じカマドで作られたご飯を共に食べれば、心が一つに結ばれるという信仰が祖先には確固として存在したのである。古事記の黄泉の国の段において、黄泉の国に行かれたイザナミノミコトをイザナギノミコトが求められて、黄泉の国にてイザナミ

ノミコトに葦原の中つ国に帰られるように説得される場面がある。その時イザナミノミコトが中つ国に帰れない原因として語られたのが「ヨモツヘグヒ」であった。「ヨモツ」とは黄泉のという意味。「へ」は先述の如くナベの「へ」であり、そこで煮炊きしたものである。「グヒ」はそれを食べたということである。つまりイザナミノミコトは黄泉の国で作られたご飯を黄泉の神々と共食したが故に、その魂が黄泉の国と共有されてしまい、黄泉の国の住人となってしまったということを語られたのである。古人にとって共に食べるということはそれだけ大きな精神的意味を持つものであった。

朱子の編纂した『小学』の中で大家族を顕彰する話がいくつか出てくるが、その中で七百人もの一族を率いる大家族の話が出てくる。そこでは毎食長幼の順に座席を設けて会食を行うのであるが、彼らが飼っている犬たちも、犬が一匹でもそろわない内は餌を食べなかつたという。一族の団結力の強さが、一族だけでなく犬にまで及ぼされているというシナらしい壮大な話であるが、シナ人の中にも共食の精神的意義とその重要性が明確に認識されているということの証拠であろう。

翻って現代の人々を考えると、家族がバラバラになるのは当然であると言える。それは共に働き作った食物を共に食べ合うという共食の儀が家の中で行われていないか、行われているとしても極めて少なくなっているからである。学校で給食を食べるのが当たり前、同僚と居酒屋で飲みながら食べるのが当たり前になっている現代人にはそのことの重大性が分かっていないのである。イザナミノミコトはヨモツヘグヒをしたことで黄泉の国から愛するイザナギノミコトの居られる中つ国に帰還することが叶わなくなつたのである。人々がそれを意識するとしなにと関わらず、カマドを一つにするということのもたらす影響は甚大である。一大家族国家と言われる我が国の本質が家族の中にある、家族の団結を重要視するのであれば、倫理徳目も言うまでもなく大切であるが、共働共食し魂を一に結ぶことから正すべきであらう。

## とよくも農園だより

三浦 美恵

朝晩と日中との寒暖差が激しく、日の入りも随分と早くなってきました。今月はアスパラガスの収穫、ネギの収穫・定植・畑準備・片付け、里芋の収穫を行いました。

アスパラガスの収穫は、春夏をピークに一日一回に減っていましたが、それも気温の低下とともに終わり、週三日収穫・出荷になりました。一年間の中で唯一収穫がお休みになる年末年始が少しずつ近づいていることを、収穫を通して実感します。とはいえ、まだ防除、草引き、水やり、週三回の収穫はあるので、あとひと踏ん張り、着実に頑張りたいと思います。

ネギは十月に入って調子が上がってきています。夏のような厳しい暑さも終わり、九月のような長雨も去り、ネギにとって最も成長しやすい時期です。少し手をかけるだけで順調に育ち、葉先までピンとした美しいネギが収穫できています。これからは気温が下がり、寒さでネギの成長が止まってしまうです。そこで今年初めのトンネル栽培を計画しています。定植したネギに透明のビニールをかけること



で、そのトンネルの中だけはビニールハウス栽培のように暖かい温度で保たれ、冬でもネギがよく成長します。大きなネギ農家は実践していますが、トンネル資材の費用や手間、また風で飛ばされるリスクも考えて、今までは取り入れていませんでした。しかし今後もネギを主軸に栽培していくことを考え、今年から取り入れる予定です。資材の比較やネギの植え方等、研究すべきことが多いので、早めに計画を立てて取り組み、冬も順調にネギが収穫できるようにしたいです。

里芋は、新型コロナウイルスの影響を受けて売れ行きが芳しくないよう、価格の下落が例年より早まっています。私達もネギの端境期にアルバイトの方に手伝ってもらいながら、急いで掘っています。里芋の収穫は、周囲に危険も少なく、子供達も仕事に参加しやすいため、息子と甥っ子の二人を連れて畑に行くことが増えました。畑に着くと、土遊びをしながらも、掘った里芋を収穫籠に入れていくお手伝いをしています。息子に家で遊ぶのと畑でお仕事をするのはどちらが楽しいかを尋ねると、外でのお仕事の方が楽しいという返事が返ってきました。家でテレビを見たりおもちゃで遊んだりすることよりも、畑ですと両親の側について仕事を手伝うという、一見素朴な一日が、子供にとっては実は最も楽しい時間になっているようです。少し前までおんぶして畑に行っていた息子が、一人でキャリーを運んだり、出荷用段ボールにマジックペンで記入したりしている様は非常に頼もしく、時の流れの速さに驚かされません。元氣いっぱい日々成長している子供達に負けないよう、私も毎日の仕事に精進して行きます。



### ★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

### ★一燈照偶 万燈照園

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

### ★年会費

一般会員	三千元
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

### ★振込先

「ひの心を継ぐ会」  
 愛媛銀行・本町支店・普通預金  
 口座番号 6142735